吉田　絃二郎

吉田絃二郎（よしだげんじろう）は、日本の小説家、随筆家。佐賀県神埼郡西郷村（現在の神埼市）に生まれ、幼時に長崎県佐世保市に移る。本名は吉田源次郎。佐賀工業学校金工科（現在の佐賀県立佐賀工業高等学校機械科）、早稲田大学文学部英文科を卒業。 大正４年（1915 年）に早大講師、大正13年（1924 年）同大文学部教授となる（教え子には井伏鱒二等がいる）。教職の傍ら詩や小説を多く執筆した。昭和９年（1934 年）に早大を退職し作家活動に専念。小説・随筆・評論・児童文学・戯曲と幅広い分野で活躍し、著作集は240 冊にも及んだ。昭和31年（1956 年）４月21 日死去、享年 70。

神埼時代 ―― 生誕より幼年期

心のふるさととしての、豊かな感性が育まれた。

絃二郎は、明治19年（1886 年）11 月24 日、西郷村莞牟田の母親の実家で生まれた。祖父長兵衛と父栄作は明治維新後、仁比山で酒造業を営み栄えたが、醸造米が腐り破産した。明治８年以降、一家は莞牟田を中心に転居を繰り返し、明治19年千代田町に住み、筑後川で運送業を営んだ。しかし、石灰荷が水をかぶり船が焼失したため、明治23年一家は軍港景気にわく遠い他国の町、佐世保へと転居した。

▲莞牟田生家跡遠景
母方富山庄蔵は大庄屋であった。二棟の籾倉・収納倉その東に離れ家があり絃二郎はそこで誕生した。

▲チャッポン池
当時チャッポン池は屋敷内にあり、今はチャッポン堀という

筑紫の秋よ、
お前を想う時
私の胸は疼く。
吉田絃二郎

▲吉田絃二郎　文学碑

▲仁比山酒造所跡
維新後、仁比山の山王社の鳥居のあたりで、祖父・父は酒造業を営んだが失敗。明治８年頃まで居住。

佐世保時代 ―― 幼少年期

新興の息吹、豊かな大自然、あたたかな友情は、絃二郎に文学者としての、深い心の世界をもたらした。

▲九十九島

佐賀工業学校時代 ―― 青春期

故郷に学び田園の風物が強く印象づけられた多感なこの時代は生涯の文筆活動・人間形成を決定づけた。

▲佐賀工業学校旧校舎・同校 60 周年記念アルバムより

対馬時代 ―― 兵役期

念願の早稲田大学文学科に入学するが対馬要塞砲兵大隊に入隊。国境の孤島での兵役生活をおくる。

▲当時の対馬砲台・国民宿舎対馬所蔵

▲対馬上見坂公園「島の秋」文学碑
文学碑の題字は小説家火野葦平が書き、文を詩人の福田清人氏が選び、碑文の文字は、対馬の洋画家津江篤郎（つのえとくろう）氏が書かれた。

早稲田大学時代 ―― 教師・作家期

母校の講師・教授に任用され教育者としての信望をえると共に作家としてもその地位を固め作風は一世を風靡した。

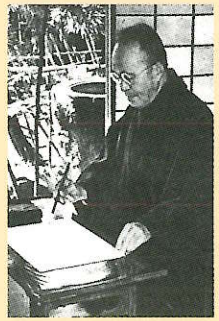
▲早稲田大学講義風景
『吉田絃二郎の文学、人と作品』原岡秀人著より

▲当時の早稲田大学大隈総長記念講堂

作家時代 ―― 円熟期

昭和9年（1934年）48 歳 早稲田大学英文科教授を退き自由人として作家活動に専念し、日本近代文学の代表的作家となる。

水蘋（みぎわ）の花開く時、
誰れか知らん白雲の情
壬午初夏
絃二郎　写
「みぎわの花菖蒲と慈姑」
「壬午」昭和十七年（六十年に一度巡りくる年）



主な作品

- 小　説『磯ごよみ』　文壇的処女作で対馬が舞台。
- 小　説『島の秋』　対馬の兵役生活をもとに描かれている。出世作となる。
- 小　説『清作の妻』　人生の悲哀と流転の相が描かれている。
- 感想集『小鳥の来る日』　大正・昭和初期のベストセラーとなる。
- 戯　曲『二条城の清正』　歌舞伎座で中村吉衛門によって上演。
- 童　話『長谷寺詣で』　少年少女小説。
- 童　話『天までとどけ』　灯火を灯し続ける子の純愛物語。

映画化

- 1924 年　清作の妻：村田実監督、浦辺粂子主演　日活
- 1930 年　飾窓の中の女：松本英一監督　帝キネ
- 1937 年　盗人厩：嵐寛寿郎主演　新興京都
- 1938 年　春の逃げ水：新興京都
- 1941 年　江戸最後の日：稲垣浩監督、阪東妻三郎主演　日活
- 1965 年　清作の妻：増村保造監督、若尾文子主演　大映東京

▲吉田絃二郎著作集

あたたかい風
南の空から
あたたかい風が
青い黄色い野良を吹いて
やってきた
南の風なら　故郷の風だ
大きな息して
吸いたいだけ
吸ってみよう

【吉田絃二郎 全集　第16巻】

【吉田絃二郎 童話集】
（表紙は生徒、児童の感想画）

神埼市立図書館所蔵